夢想兵衛胡蝶物語前編

四

へ 13
3096
4

夢想兵衛胡蝶物語巻之四

東都　曲亭馬琴戯編

強飲國

強飲國は酒をのみて食とし飯を食ふものを野夫として笑ひ餅を食ふものを贅家として卑しめ茶を喫ど耳を好ど松魚々々の初声を聞くときは布子を飛して差身をもて好ぶ。飲や唄への二上りに浮きては財布を傾けて身上の根抜を踏抜く。これよりて酒の気はいつも盈ちて竟に備への渕となり。玉の觴はひろく乾のぼつて内損の薬壷となる。されば酒は百薬の長なりといへども至て過るときは又萬病の半なり。長たん熊坂の号を混ぜて盗人上戸といひてもうるはしといふ。古人の三友も酒をのみて琴書と一坐すると琴には耳を楽ます。書には目を悦ばしめ酒には口を楽ましめて君

門 へ 13 3096 巻 4
昭和九年七月二四日 購求

子の文ハ一斤の席料を論ぜしてれ雑炊の名より泔ぐ小人の文ハ。三文が智恵嚢を敲て八文の醴より否なり。酒ハなりうつのけれども、聞よ及べどといふ冷好も。亦一竹と呼びしも更よ科目ある似たり。東坡ハ酒落て掃愁帚と。梵きるハ呼くえて般若湯といへども味酒の三輪のむかし。枚葉建ちし又六が門を。極楽と定め終よ此方をえらりと締る辞世ハ呉志よ似たるとあくとろいへ青州の従事と云。腹腑よ至るの謎。真一先生と云。三が一つの隠語。彼飲中の八仙歌ふも。李白ハ諸白の唐名よあらじ。萬葉の十三首よ。大伴酔て子ともす労る。一盃ハ人酒を飲み二盃ハ酒酒を飲み三盃ハ酒人を飲む声をかもして泣上戸より。泣なぞ罵り腹立上戸。笑上戸よ捨上戸。理屈ぐん呑。ちかいて寐るハ。門の掃除よ間酒拾得。五徳をかけて小鍋ぶそ端婦

ぞんのある。足下のうるふハ上戸の癖なくすくて七癖あるとえハ。堪情なる刃山風味え未高しといへども。顛遏まで登るとなく。七ツ梅の一本生その香ハ鼻を穿つとも。下戸の為ふハ関うじとぞ。酒よ目のなき人も又騎がぬ前の杖をもえだ。飲とえハ蚋よ似て。坐の長うらんとえ忘まさまとえハ蜂ふ似て。味ひ蜜のごとしといふ果林酒池の荷の盃より。樽底の濁りよ涂むとも小料もこれがるよ免され大礼もうるまとかゝ盤らべし。おつらば酔ぞ乱まざるを。真の酒宴といへべけれど。强飲国の習俗なれば。いづれも砕て飽まで志らしん。生平ふハ柔和忍辱ふて仏と呼れしものも。砕が忽地悪鬼のごとく。啞白も言数多くなり。日来ハ壊し述懐も。酔さ纷まずいへてのけ。氣恥しのとも思わねば。おのづろなのを繰りくる。天を窮人管をすく。結加趺坐けし偏袒右肩。彼百目のげうぶうも出反吐一ヶよ吐ちらし眼を瞪らし。肘を張り。涎を流し。足を空ふし。一歩ハ高く。

一歩は低く。蹌々踉々として。敵かあるよなげ罵りおつちへよろ〳〵ころ〳〵ところ。合してあちらこちらの。勘定も無着にして懐中の物を遺し。両足溷へ踏込でハ。汁粉を食ひし箸のごとく。酔さめてハ石を枕とし。醒て流るゝに嗽げども塵にまぶれて隠君子に似ども。その日の活業も。これが為に懈る。火急の要用も。これが為に廃してあれば一室にゐるとされども家も走馬燈かと疑ひ惑ひ。ひそかに燈火に対ひても。火頭ちよつのあと万燈のごとく。筆を採ばゆびがふるへ。針穿ば足がよろける。よい年つかまつて。男子のさし合ぬ縁らば。小娘をとらへて大声を揚させ。婆々に戯れて。眼前恥しめられ。[illegible]ひよぐる春に羽団に柳を画き。低くうたふ鼻唄。その奥いまだ央ならず初献ハ慇懃にして。三献ハ卑しく。九献の生酔本性たがハず。せつかく硯蓋をあらして鼻紙に裹む焼平の切身に袂の濡るゝ紙厭はず。焼物の鯛ハ一分も大きなるものと思ひならけ。引物の果子ハ甘きを嫌へども辞せず。盃のやりとりハ。虞芮の訟よりもむづかしく。未決の下戸ハ胡越のおもひをなして疎し。既に酒あり肴あり。肴あれども肴絶ず。これに倍に三絃をあつてし。三絃あれどもいまだ弾ず。これに倍に端唄をあつてし昔の朗詠小謡と変じ。小謡ぞろへて流行唄の。鼻唄をそろへて拳とる。一ッ穴の狐釣狐茶屋を中に空鉄炮。諷やロ合の。おりたいげの餅搗ひも。悔りに擬で餡餅とあつて。嗔ゝ気に叱らる。夫婦喧嘩も夜半なれ打ずに泣せる笑ふ者ら。宵一宵四隣を驚しても。夜前ハ大きに絵酔ました前後忘却気の毒千万ぢや。ハ造作ハ厄介と。勧解せば人もふたゝび咎めず。生酔の女房ハ生酔熟てもろ扱ひ。お寺の納豆なるやうに。大あくびを勝ちして。双物をこぼせ[illegible]茶碗をかくし。讒言いふても罵ても。茶にもせぬ塩茶ぐつと碍され明れハ掘の藷するごく。頭痛鉢巻色青ざめ朝日さまうら二日酔。晦日に酒屋の勘定へも。

今さら胸につかへどゝ口さみしさ友ほしくなりかの手盒迎酒もなへちに
よつと小半合かぶ一升二升三ぜふの小瓶活も浅いきれいのなで五升もとくろの
あまり酒。亭主つめって雪の朝月の夕に花曇り。ぬくさなくで飲ぶかり。一合
かける居酒屋の床几に腰をうちぬかし。紅葉がくしの湯豆腐も穴のあいたる
袂から浅つけるなべてころがるも跡へおどろや間酒と夜の声ぐるに好ましく。鄰
で敲く鴨の骨。咬みけべきく徒二杯つもまで。家にいへあらで女房を口説おとして。
又説さる僮に四百通用の蒲團をまげて肘枕。所へその中におりされば
これのゝ茶蘼瀝にずぶろく酔てうまくも寝られ飲ぬ妻子へ柏餅。只名ぞろう
小丸寝して腫にも満ぬ夜や寒衣や薄れたる。衣その紐火鉢を抱よさる。炭
團の天窓敲くあどるの泣く子どもをとりかへせん。只前の世で無縁をむごく
あたりし報ひなく。亦今生へ欲を倒まと生れ来って酒屋の為に茶立てて

とへ立つ夫の料簡下戸の建たる庫もなし。それともありやあらまし。から酒配り
を待かね山ひまとへいへぬらんなる月神にも造酒のそろの人物。火宅の煩脳うち
流されん。気ちがひ水の徳なりと兵意地たって聴納もせぬ男は男と云へども。
女の酔たるはなほさらし。膝から身もち持崩を。横筋違におそろ切り。
酔がまわつて高笑ひ踊る内儀は久しからずと譬にひくや三絃の糸まで
さらに又定がさるへ文句に三下り出の猿も狂ひ出さ娘一轉瞽八盃。不義
淫奔の媒は酒の咎とはいふものながら此国の常なれば地黄坊樽次が。
水鳥記にも並ぶして只飲を以友として交り。膿血にあつまる蝿の如く。据
ぜましどもその香を知る。初対面からうちとけて理なひ願ひもつひでうち御
馳走酒の粧筋美ひ盃を上て飲ず理なる酒。めぐりくて終その身におちて
砕る割膝も。果は酒毒の浮腫となり。吐血内損卒中風にて忽地ころり

山椒味噌。つまり肴で立飲に。冥土の迎ひうくるとも。ちろりも携えて送
る。無常の風に吹きれても。あのまゝ浮世の酔醒し。泡影夢幻の水盃一口助か
るのもあつく。終の薪に間陶も。焼けて後ハ舊の土円来ハ嫌ひし強飯で。
人を餐をふかくしさ。やまぶおつろろんに惜いるのといへるまぞう捻回向何とも
南無阿弥檀那寺の。和尚の長い引導をまちうねてたちや逃支度。
誂たる穂の着到も。残るハ釈の泣よりなく。鯛のめら煮を舐りあひし。
水魚竹馬の飲仲間も。死でハ骨を捨よてくまぞ。世に斂難で死るふれ。
斂の字つくる例ハあれど。酒で死でハ戒名に。酒の字をつけられ給ハゞれを
孰とうれぐさけまど北邨の雲鳥部の煙新葬累とう土饅陜下戸うと見れ
バ。上戸の墓なりよる経に夢想兵衛ハ。酒旗町の三丼目。蛇の子屋飲太郎といふ
議飲宿に逗留して至つの形勢に與さめて。つぎと思ふ也う。生ハ人の楽む不死

ハ人のおそるゝ所。嗜慾の為にその死を忘き人に酒を強んとて。ぞうか命を縮る
ハ王獲が奴を倒あして物を追ふに異ならねど。鴆毒や砒霜のごく。立地に殺が
見えねバ。死るねつかりで大酒しても。ぞうやかやら死ぬるものあしかし。飲めど
酒ハ薬なく飲めハ毒となる也又酒なれバ。その過をとゞめるへ。養生をする
ものありて。その養生ハ獨酌にあうぞ。上戸とあきべ人が許さぬとも死ようれ飲
酒も度うさうれバ身によある。文選枚乘が上書にも。泰山之霤穿石。殫極之
統斷幹。水非石之鑽。索非木之鋸。漸靡使之然也といひしごく。山より落る
霤も絶ずうらとつ巖石ハ穴をあけ。車井戸の釣縄索も綰えとえ久しければ
竟に幹を斷が如く。酒ハ人の命を削る。漸なかうねども飲王久しけきバ五臓を
破る酒を飲をけづるといふも。この因縁とあどれう。凡疥飲國の人の腹なへ酒を好
虫が生て鯨鯢の潮を吸ふごく。上ゟ飾る酒を吸入东脾胃ふへ納る限が

あれど酒だくりハ彊なく。一斗も二斗も飲ほどに。みな彼虫の所為なり。すべて人の腹中にハ。九ッの虫あり。伏虫といひ。蚘虫といひ。白虫といひ。肺虫といひ。胃虫といひ。鬲虫といひ。赤虫といひ。蟯虫といひ。肉虫といふ。又尸虫あり。この虫人と共に胎内より生ず。又寸白虫あり。以上十一種。就中白虫ハ酒を好むといふ。凡この虫ども。腹中にある時上の旬ハ頭上に向ひ。中の旬ハ中に向ひ。下の旬ハ下に向ふ。この故に後世なるものの月の初四五日の間。五更の時に用ひざれバ效なし。昔扁鵲の弟子に扁知己といふ薮医あり。酒毒の人を殺さん愁ひて。月上旬に馬の涎沫をとり。或ハ蜀水花を酒に浸し。殊に大酒の人に与へて。彼酒を飲せしかバ。その人立地に下戸となりて。亦酒塩ども得飲ず。その人酒を飲ざるなりて元気頓に衰へつ。物忘まして愚蠢となりぬ。人是を見てよくくといふ。その身に于て却ころ。これ角を伐て牛を殺し。枝を棄て樹を枯すに異ならず。されバ酒ハ削

客を正さし聖人も。乱酒の病ハ済ひがたし酒を好バとりく飲むべし。酒ハ常に飲まずべからず。上戸ハ奈良漬を食ど。下戸ハ却糟汁を好む。亦是銭ある人ハ綺羅を好まんど。銭なきものハ却美服を嫌ふて。驕ると穢とハ異になれども。彼も慾なり。これも慾之。かゝる故に嗜慾を擅にするものハ。百年の寿命を捨ひ。飲食を省くものハ却半生の気力を肥さし人として慾なきものハあらじども。万の慾をひそかによせ惜むものを下がらげにして。命ぞだしといふことを忘れし。どハ己を忘れて狼生ハなし。人生まくし世にある程ハ久しからバ。雲べ水の氷となりて形とるなれども。その氷や雪ハ。春来る毎にきえて久しく消て旧の水に。かへらずといふことのけまいど。是を氷室に蔵おけバ。夏すぎも消らせず。されバ氷と雪の狼生ハ氷室にありて人の狼生ハ。嗜慾を省くにあり。この論究めて暁易し人の性ハ善なるものにして莫私子此との札を打ても。そのふまじきる為に札に

鳥居を画ておけバ。ここらへハ恐れて尿しせず。されバ凡夫の心ハ眼に預
ておくものゝ定し。たゞ禁酒するものも。もつら破らんと紙幟して。神仏へ
誓言状をかけるよりハ。きんせんの札へ。鳥居を画ておくに如べし。慾で禁る的
なれバ。余所の精進日ハその神仏が目にみえねバ。奥に心がない。我と忘れて
禁酒を破る。これらハ。おのが一心の胸前にあることなり。臍の下にあることなり。一生まう
ね類なれバ。酒に魂を奪れもせし。只悼く覧て美しく行ひ。其徳に明まよく楽しむ
に通ざる人ハ酒を飲ども乱るゝことなく。戯謔すれども諠をなさず。病といへども
癲狂せず。奸人もこれを避るゝぞ。狐狸も魅しえず。国にある人を称して。酒中の
仙といふべけれど。強飲国の人は酒に呑れて乱酔し。狭危を醸すのミ
嗚呼いふべし慎べしと。そ能く説きけても情なるや。その生酔のなるれバ。
真実おハ嘘らく。今一言いふよりと横そうふを拳あげりねね面

魂ぞうと睨つけて又莞然と笑ひ。お身ハ下野夫といふものぞ。謡曲と香の物
でハ酒が飲めぬと古人錦考もいはずやなりゝ。況て生なかゞら引導をわたさ
るゝせうな陳紛漢ハ聞なうちに酔が醒る。二百が鹿朶を買ハ志めべし。とう
へきつかるせうな理屈をならべて。さらいふざれてたまるものか奈良茶屋の煮豆
でハおつめべし。堅といふても大槩があるもんぞ。賢人でもなん人でも含貝ゞ肴ハねへ。
潔く受て一盃飲つし。なぞといふなお主ゞ款せずさ年かあらく出ろ。と罵る
声ハ百千の霹靂に異ならず。夢想兵衛ハその勢ひに辟易して傍杖打
れぬ用心しいよおゝどのことぞと。おそれず揖捘をまろくさけれど。郷に入ては
郷に従ふ。これも礼行とおもひなし。あるれハ肩賃て酔漢の杖となりやする
あるものハ小間物見世の掃除して。いらぬ目を送れバ。それもかゝふも憤うれ
ぬもしぞ。かくまで廣い強飲国に。せめて独り醒るものゝあるれも由ある

べきとおもふ者あるともなかるべけれど其のみのうち説伏せそ。禁酒國とて
べからずとふ事にて酒を断りのも。酒塩と号して些二だろり。生塩をつまみ入れて一盃
やらんも呑れども亭主ぞ。酔ねざれバ罪をも厭へ後にハ塩も入らずべくぞ。禁酒破
れども。賓主の礼なく。喧嘩買ふ人ハ厠買より多く。賣人詞あれバ買詞の相場
が狂ふ。飲む者本残に。酔が商賣なりにし國なるものと。ぢより呆れて飛べく
志べし心を慰るよすがもなきと旅宿を出て。江潭に吟ふる。三閭大夫り
あらねども三里太夫な道をいそぐ。此案内者を備ふて。まづ一の宮へ詣れバ。
當國の一宮ハ南山壽星と山田の大蛇とあハせ祭り。左手のかさふハ劉伯倫
淵明李白の禿倉あり。右手のかくふハ儀狄杜康の神社なり。升酒李士
が書齋の蹟。麹生秀才が花物屋敷。和田酒盛の大坐敷。樽次が古戦
場。おのく縁起縁故あり。彼案内の阿爺といへる。このらもおそのじく酒

まく
糟漢なく。ひようつく足を踏そめ。抑これに語りおしますハ南山壽星乃
太神。漢土唐の帝のとき人間に出現して只一息に百盃の酒を若もなく
飲みハ。酒毒の守つく一夜の中に天窻忽北長くなりしてのおハ頭に象く
て。陶を造りえじめらる。相殿ハ山田の大蛇稲田姫の色気より食気がこふと
仏陀とあげ。唐の芋ふへあらねども。八頭を掉立て。八甕の酒をかうらひ。素
盞烏の尊の為に。尻を砕られなひしより。酒を買て尻を切らるるといふ
世諺ハ日本神代の時より起る。儀狄ハ唐山禹王の時はじめて生酔
を造。酒屋杜康ハ杜車の艮方株。劉伯倫ハ底抜なり。陶淵明ハ五柳
先生李白一時四百盃。斗酒学士ハ一升の酒を一日も缺ず飲し。唐の
王績が綽号なり。麹生秀才とまうせしハ茶法寺紙酔せしとき。現化し
たる酒の神。和田酒盛ハうるなれぞんじ。樽次ハ大塚に世をさけ好の医師にて大

師河原の底深と。酒銭の高名揭ぐ。十六人の酒の弟子を引つれて此
國へ渡られたりし神なりとぞ。ろまりもおもらぬ長物語に。夢想兵衛は退
屈してそれより案内の阿爺をかへし。行こと十町あまりにして天酒山美禄寺と
いふ大刹あり。大門の造なへ。許葷酒入山門といふ。戒壇石をたてられたり。
いと神々しき酒林流を霞の間に見せて。堂塔なかなか。一盃飲ねばならぬ
さん堂ちんさいものでは七面堂。六尺有るの五體堂も。内損七斗のかんかん堂向
にみゆる山へとちらと見つら井に四方の赤。池田伊丹の諸白蓮華さしたを
手にもち。酒の穂と一粒々に積あげたる五重の塔は鈎菱なく。酬為醞堂
竈とるよべし。滅法大酒の異地なり。おもし薬酒如来の開帳にて瑠璃壺
よりも酒壺と老若男女歩々を運び。胎香の善の縁に携る群集は押
合へしあひ。合は手本とおよび紙投盃の塞銭に銚子のかゝる経文を有

がらいとて手をとられ。おかんで如る大盞も。一遍まわる異宝は。ならく左りが利
携手。まづ一番は中の関白。道隆公の烏の盃出処を問ば大鏡乃巻の六合
入り二番は浪に兎の盃和田が酒もり。小林のあさくええても七合入りぞそ
三番は碗久がびつくり丸は八合入り。四番は乃地黄坊が蜂龍いろは一升
入り。五番は向菜君ちらどこれ浮瀬の手そりもの。吉野が蟹の盃は。顧
太初が秋をうつし。人のまねする鸚鵡盃飲ぬも驚る。鷺の盃は張姓李
氏が盗ひつれ彼李迪之が九品の内。蓬莱盞に。海山螺。辞仙螺。匏子巵
慢巻荷。金蕉葉に。玉蟾児。李宗閔が荷葉盃質にあつねど流らる
受つ。曲水の觴に潯陽の江樓をそえて月の鏡に芦の葉の呑口付し
猩々盃。和漢の異宝数を尽して恭しく餝らそ。無礼講中麻上下
の尻肌脱で手拭持まれ縁起いひそいつめしく。亦とは盃のかろのひ

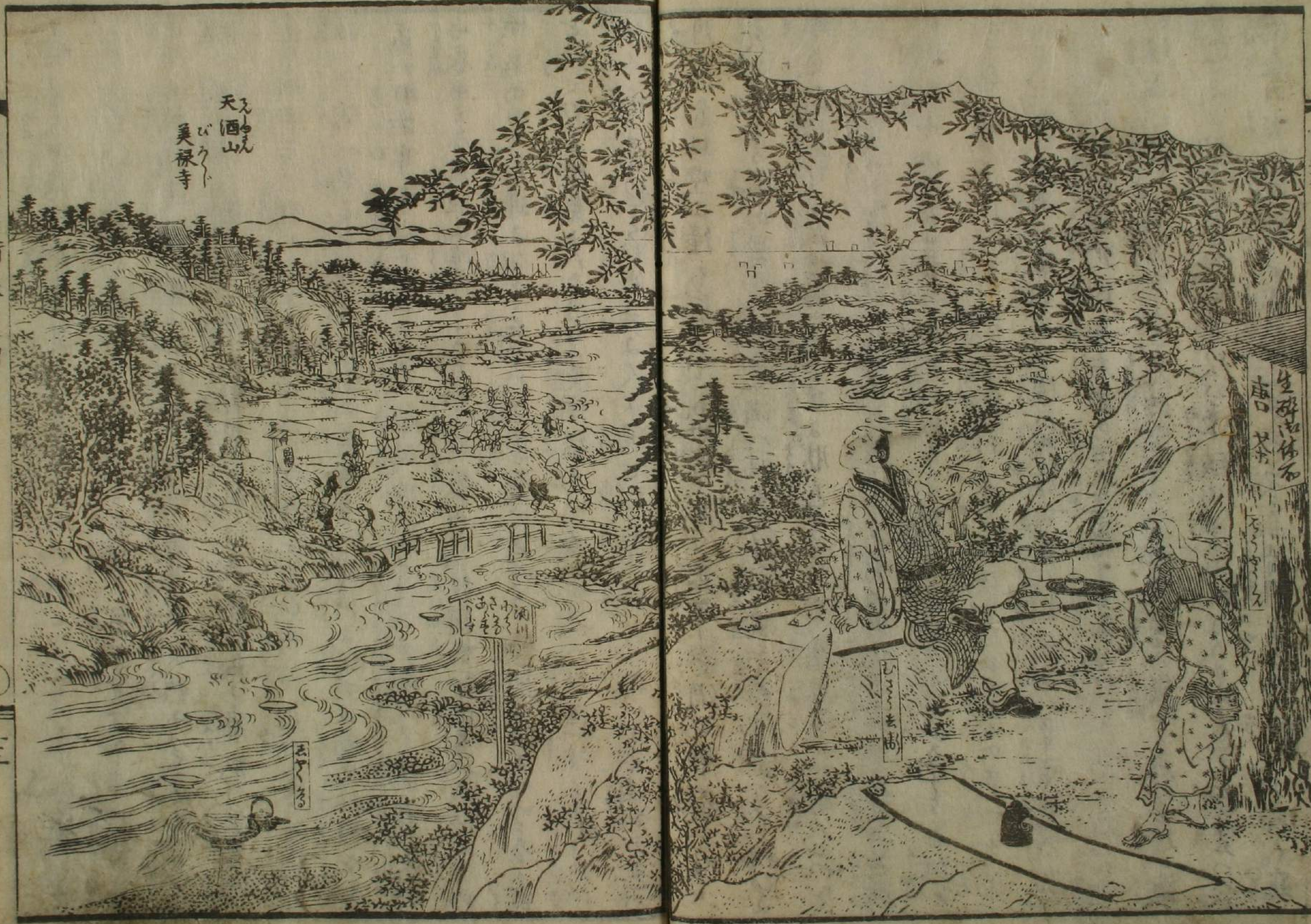
ませぬ。げに酔て拝めされませう。と申せども。下戸の為には生有がごとく。夢
想兵衛は酒臭い群集の息に頭痛がして。早く下向に赴しが左りを見て
も右を見ても。酒屋のまゝにて茶店はなく。人の門に銚を出して。茶碗三ッ四ッ
柄杓を添。ふるまひ酒と札をつけしハ。六七月炎暑の比の。ふるまひ水に等しけ
れども。かん徳利咽喉が乾ても。酒を呑む気はさらになく。天城の山越する心地。水に
さへことを缺く。下戸の為には一千日も。暮されぬ国なりと呟きながら大の寺の
境内を出たるのみが。樗の木でかこひたる。茶店らしき葭簀ありて簷に
掛たる行燈に。唐茶の二字を写しあれバ。夢想兵衛は悦しく。通り町で小
便所を見つけたるおもひをなし。ちよこ〳〵と走りよりて。床几に尻をかくるを見て。あるじ
の翁さし心得て。磨手の筒茶碗になみ〳〵と汲で出すを山吹色も好ましく。ひとくち
呑ミ一口呑ミ。ぐつと飲バ冷酒ことならず。夢想兵衛は半吐出して。拘摂おとし眼
も口もひらくによせて拵のこゝろあて声高く。唐茶とあれバ龍團か。雀舌かとおもひの外。
酒を飲ぬ人を欺くにくき文盲阿鄙奴と。床几を敲て罵りけり。

○酒茶論

あるじの翁これを聞て。呵々とうち笑ひ。客人おとなしく。萬物に異名あり。異名に
文雅俗あり。蘭陵とは今華の本名。李白が詩とぞ名にたる紀。蘭陵美酒鬱
金香と賦しけるハこれ金花酒也。赤蘭生とは。漢武の酒。煬帝これを玉薤と
名づけて呼せし例は多く。醇儒と号し。懿侯と謚り。醴泉侯に封ぜられ。唐子西
が滑稽にて般若湯とは和尚の酒。東坡の掃愁帚よりて見れバ。掃愁帚と
なづけて愁を掃ふ玉帚ともいふも皆これ酒の名。俗人これを唐茶といふ縁
故を尋ねれバ。謝安が煎茶に異名して代酒従事といひしに逆ていふハ酒なり
唐茶といふ酪奴といふも茶の異名。酪奴も茶の名なれバ。茶を酒の奴僕とし。

酒をもて茶の君となすも強飲国の私なるべし。和漢の故ある所考ふ。進雄尊の脚
摩乳手摩乳に八醞の酒を造らしめ給へば神代の昔より酒はあり。唐山にも禹
王のとき帝女儀狄が醸るといへど黄帝の時既に酒あり。茶を飲といふ事ハ後
にて類聚国史に弘仁六年六月壬寅畿内及近江丹波播磨等に茶を植
さし毎年是を献ると見えたれバ嵯峨天皇の御時にはじめて是を植られたる
歟。唐山の史にハ呉志にみえたり。孫浩がとき荈をもつて酒に換るといふ事あり。
三国以前に茶ハ唯えざれバ酒の名目を竊で茶にも名づけたるにやあらん
その二三をいはゞ酒に鵝黄の称あるを取て煎茶に蟹眼あり。醪酒を如蜜
といへバ団茶を赤蜜丸といふハあまりにまぎらはし。銚子に似せて土瓶を造り。
高脚杯をまねて茶碗を造り。盃台から茶台を出来し。酒瓶を見て茶壺
をこしらへ酒に肴といふ所を茶は口すさみといひ。寂し。酒をもて茶に比るぞ。

月に泥亀挑燈に撞木ごとくなれども。世俗なまじく異名して酒を唐茶と呼ぶ
ハ。もとより茶の栄あり且つ酒ハ味美にして七碗をも傾るものなく。飲むに
酔ざることをなし。故に盧仝が七碗に勝まさるものとて唐茶といふ客人これを
去らばして文盲くとて抜きちのみ。おん対して文盲なれと光実な返答懸河
の辨。敲手丹しける孝忠兵衛此奴をよわどをなせると笑ひなどしも臥を
うち掉ひやくそれハ故ある附之。茶ハ神農より飲はじめて魯の周公も茶
好なり。その後斉に晏嬰あり。漢に楊雄司馬相如。呉にハ韋曜晋の代に
劉琨張載遠祖納謝安左思の才人皆茶を飲ざるといふものなし且今
の酒盃ハ上代の酒盃なりしを。花活などにいふものこそ昔の觴をまねても造る酒
器とえやなるに茶器を造るといふハ牽強附会の説なり。これまで所きつれば
酒毒の害を説諭して茶飲をよせんと思へども。皆辞漢なれバ説によりなく。竊


天酒山 美禄寺
生酔治体丸
唐茶
酒川
むさし吉田

に醒る人を寡ぬれバ。足下ハ甚老実にて酔といへども いまだ乱ず。いま
たくバ人をなぐるほどに強ひなりぬべし。およそ酒の害をきかんや。本艸綱目巻
の二十五穀の四。造醸の類に云 米酒ハ気味。苦甘辛大熱にして毒あり。久く
飲バ神を傷り。寿命を損じ。筋骨を軟げ。気痢を動し。酔臥して風にあ
たれバ癜風を発し。酔て冷水に浴るときハ。痛痺をなすも丹砂を服する人ハ是を
飲バ頭痛吐熱をなすといへり。又その外ハ美禄寺の境内に近より因て仏説を引
ときハ。釈迦牟尼仏在世のとき。安竭陀といふ位上戸。酷しく酔狂ひて狂
も衣もなき反吐に塗らしたりける因縁にて。飲酒戒を立給ふ。又ひとりの
餓鬼ありて目連に問て云 われ頑愚にして在るよしは。安婆にていかなる罪
を造てかゝる餓鬼となりたるぞ。因縁きかしめんといへバ。目連喚てうち点頭
汝人間にありしとき滅多に人に酒を強醉し倒せし報ひにて酒をえまバ

水となり。その水を飲んとすれバ。赤土地に火と変ぜ。いかやとらへに手を焦て。
無体に酒を強飲する人ハ人を食でなくして毒餌をすゝむるに等し。不仁とや
いはん哀れとやいはん。されバ酒に三十六の失あり人あし酒を飲ときハ。さなきの
三十六失を犯すものなれバ。故に仏ハふかく是を戒む。酷しき至てハ天下
を失ひ身を亡すなど是。酒の咎なりと。息勢張まバ。いかんなく。客人酒
はちとなり。科あるにあらずといへども。酒に大なる徳あるにあらずや。まづ本艸の
主治をいはゞ。米酒ハ薬勢を行して。百邪悪毒の気を殺し。又血脈を
通じ。腸胃を厚くし。皮膚を潤し。湿気を散し。憂を消し。怒を発し言
を宣。意を暢とハ。蔵器の説。脾気を養ひ。肝を扶。風を除き。気を下すとハ
孟詵が説ところ。馬肉桐油の毒を解し。丹石発動諸病を治す。熟しくして
これを飲バ。甚よし。一時珍もいへり。されバ仏も酒を賞て甘露の良薬と賞ひ

き。又波斯匿王の末利夫人飲酒戒を犯せしを。世尊これを咎めたまはず。かく
のごとくの犯戒ハ大功徳を得るとて。却て是を称美さるゝによつて。菩薩
ハ酒をもつて人に施せ。仏に於て過ることを説もひしも有なり。四天王
ハ天漿あり。これを名つけて花酒といふ。阿修羅ハ四天海をもて酒とてこれを
飲ど。なほ足ざれバ常に酒といふ。常に酒ハ阿修羅の醍醐の上ハ四天王より
下ハ阿修羅界に至るまで。酒を好まぬ仏もなく。如来蔵のその中に。
酒の徳毀あれども茶の徳ハ終に聞えず。又六経にもこれを載せず。終
に客人なる国へ来て。酒をバ飲まで。茶を尊しがるハ。尭舜の代に桀紂を訪ひ
宝の山へはいりて。犬の糞を取るに異ならず。悟らぬ人ならずとされバ。
茗荷兵衛ハ勃然として。それハ大きな僻言ぞ。彼七仏師文殊大士ハ。
五臺山にまし〳〵て常に茶を喫し。玻璃盞子を手にもつて南

方にこの清味あり。小僧に茶飯を忘ずることを宣せしを何とおもふ。又鹿苑
茶真如茶あり。華厳の大海衆を喚起して。古来仏に茶を進らされど。
酒を借し例ハなし。されバ仏の教にも。茶の徳勝ていへるらバ。六経に載ず
茶を載ざるハ屈原離騒に梅を載せず。家持の万葉に牡丹の歌なきが
如し。禅家に是を論ずれバ趙州ハ茶を喫で七百の甲子を保ち風穴
ハ茶を賞て三巡の礼度を匡し。潙山ハ茶を摘で。體用を覚り。香嚴ハ
茶を点じて好爰を原ね。又南泉ハ。魯祖帰宗杉山とおなじく茶を
嗜み洞山ハ。雪峯巖頭欽山の為に茶を行し。夾山盌中の一甌投子
碗後の一碗九夫も是より風雅をしる。茶にかゝる功徳あり。ここでも
辞ハまぐ醒さやと。いへバ翁ハせゝら笑ひ。なぶ酒ハ第七祖婆須蜜どの。
右手に酒壺引抱て。六祖弥遮迦と問答し。婆須蜜これより法器を

みたく。桐薪して今に至る。曇摘例は蜀英なり。諸方にこれを酒曇と
いふ。或は芭蕉泉禅師は杖に酒瓢をかけて山中を往来せり。馬祖に
学和尚黄檗に。嗜酒糟あるゆゑなり。或は曹山白家の酒。或は青家
蒲萄の酒。色香ともに飲むものぞ。ある称餅に就けるもあり。陶潜
明は大酔漢なり。天一の達磨と呼ぶ。ある客人これを憎む。天下
を失ひ身を亡すも。みな是酒の為行ことなく。茶を賞るにはあらねど。
いにしへも今も夢想兵衛は。掌を拍て大に笑ひ。彼桀紂の両天子は。
酒をもつて天下を失ひ。羲和の二氏は酔るにまて遂にその身を喪ひし。
これ人のよくする所。就中紂王は酒を池とし糟を丘とし。牛飲の遊び
をなせしは畜生に異ならずぞ。よしなき證据であるまい歟といへば翁は呵を
揮り。さうぞやるべし。むかし堯帝酒を飲で千鍾を累しよりその仁万

古の今に溢き。孔子も百盃を尽しけれどその徳四海の外に光る。儀狄酒
を醸しければ。禹王賞て妙といひし杜康酒を造りし。元紀武帝あふく
憂とすなりも又高宗は殷の中興夢に麹蘖を得たまひぬ。亦仁徳
帝の御時に曽保利。曽々保利とよびし兄弟。酒を造るの才ありて。
則御酒を造らしめ。酒看郎子の号を賜ひしかば。子孫酒部公
を氏とせり。吉野の国栖酒。應神にそなへまつり室山の採花酒。醸中
に起る酒は清をもつて聖とし。濁をもて賢といふ。聖賢の道酒に
あり。傾の後には中酒といふ酔の心配ざるこれ中なり中庸の道酒に
あり。史記にも酒の徳を賞て百薬の長といふ博物志にもその功あり
みえ。王粛張衡。馬均の三人。すごの早ねに霧を犯して山路を行く
ときのまに一人は飽まで飯を食ひ。一人は甚なりて酒を飲み一人は茶針

何にも食ずかくて山路にさしかゝれば。空腹のものころりと死し。飯を
食ふハ病なづらひ。酒を飲ざるものハころり山気の悪邪も犯し得ず健
やかにて帰りしものあり。彼桀紂ハ色気ちがひ。酒の咎とハいひがたし。と
そら嘯けバ夢想兵衛ハ扇を笏にとりなをし。さそくうるさき故なる
づし。生学才のあるものでもめづらしくて解がさかん。近く譬をとる
なれバ天地の間に生ずるものハ人倫と。禽獣と山川と。草木なり。就中
人倫と萬物の霊とまをれバ人ならざるものハなし茶といふ文字をもって
見よ艸木の間に人あり。酒といふ字ハ水邊に。鳥と書バいとやすく彼人
倫の茶に及ずといふを翁ハうち消して。人にハ貴賤賢愚あり。善人
あらけれバ悪人あり。鳥にも鳳凰あれバ。禽獣じやとて卑しからず。
唐の李杜ハ名高い人なれど水邊の鳥を愛して。開元に二鳥と化し翼天

下を掩ふといへり。又韓朋が妻ハ貞女なり。康王その夫を殺し。妻を宮
中に納れども従ハずして自殺して夫婦鳥と化し。常に水邊に游び
しなり。茶腹一時世に強人ハ。艸木の間に身を隠すを茶といふ文字ハ
水邊の鳥に不及ときく人と。執念くも夢想兵衛ハ。なほ声を
はり揚て麒麟も鳳凰ぢやの。となる獣が好すくいふて呑ふ茶
にも又鳳凰團の号ありて一ごしを煮る。麒麟炭をもちひて加之茶
器と造るに金銀珠玉或ハ銅鉄土石をもってし。只一節の竹細工
も。俗者によって宝とす。酒器ハ僅に貧之樽貧乏陶の名をうるのミ。
及バぬなどといひくせバ。翁ハ鼻であしらひ。夫酒盃に金銀盃あり。
又玉の觴あり。いづれも和漢の宝なりぞや。されバ元日より大晦まで
御酒をそなへて神を祭る。まづ初春ハ屠蘇白散二月初午乃稲

荷祭ハ赤の飯より神酒が賣れ。三月三日の桃花酒ハ。下戸も至契より白酒を賞翫す。五月五日の菖蒲酒。六月嘉祥の霰酒。九月節供の菊花酒に至るまで。延年の例に酌む。三伏の暑氣日も。酒を飲バ暑を忘れ。玄冬の寒き日も。酒を飲バ冷ぞ凍ぞ。茶ハ神棚に供るものなく又常暑を凌ぎがたく。なんと一句もござるまいと競ひかゝるを茶によりけて神に茶樹の稲荷あれバ。倉稲魂も茶好なり。四月八日ハ釋迦の誕生。甘茶を浴せ奉る。卯月の利茶神無月の口切も時によるなり。濃茶一服喫ときハ。三伏の暑を忘れて二ふくろあり。玄冬の寒き日も。茶粥を啜れバ一バ汗を流せし。かゝる故に本艸す。茶ハ氣味甘苦く。微寒にて毒なし。服すれバ瘻瘡なく小便を利し。睡を除き疾渇を去り。宿食を消すといへり。古來茶を嗜るもの陸羽

盧仝に勝るハなし。唐山にて茶を賣るもの陸羽が像を竈に並これを称へて茶の神とす。されバ陸羽が茶経に云。木ハ瓜蘆のごとく。葉ハ梔子のごとく。花ハ白薔薇の如く。子ハ栟櫚のごとく。蔕ハ丁香のごとく根ハ胡桃のごとし。その名五ツ。茶といひ檟といひ蔎といひ茗といひ。荈といふ。天下の名水をえらむこと。凡二十ケ処。これに傷ていふべからず。大東にハ足利義滿公北山に金閣を造りて鹿苑茶とうつし。義政公ハ東山に銀閣を造りて。天下の名器をあつめたり。そのゝち紹鷗利久が徒代々数寄者に至りしかど。是より先建保二年二月四日。將軍実朝公の病悩但殊なりけり。是去夜の沈酔の餘氣欲變に榮上僧正加持に候ぜるの処。このことを聞。良茶と稱し本寺より茶一盞を召進ず。一巻の書を相副てこれを献らる。茶徳を誉るの書也。

将軍家御感悦におよぶよし。東鑑にみえたり。その書ハ喫茶養生記
と題して二巻あり。すなはち葉上僧正栄西の作る所今稀に傳ふ。是ハこれ
廣雅に所謂茶を飲バ酒を醒し人をして眠らざらしむといふを取れり。
且茶ハ天工の飲なり。酒ハ人作の飲なり。人作いかで天工に及んや。西
齋詩話に云壽上の人日本より回る。その國に産する所の梅尾山乃
茶を恵る。詩を賦して是を謝す。その畧に云。幸得梅山信初嘗
日本茶といへり。これに梅尾山とあるハ。梅尾山の誤なり。梅ハ和字にて
読で止我とも。字書をみるに梅の字なし。木母とかくも是梅なり。に
日の本の茶園といへバ。栄西僧正宋より帰る日筑前國背振山に
植るを世に岩上茶と唱へり。その後梅尾の明恵上人栄西に種を請て
梅尾に植。又宇治に植。近代宇治を第一とす。彼宇治の茶に別稱あり。

世上に別義極揃宇治の名園七ケ所を誦る哥とて宝なり。曽呂利
性この哉するハ。あり井。う文字川もなし。おくの山ぶきしの朝日。びゃくこ
こそあるじ。又女木艸に茶をのめバ。痰をきりつ。熱をさます。痰をあるかし。
上気よくなる。又銅法師が。筑前の岩上茶を誦る哥にこゝろざしも浅からず
梅の尾さもあるく。お茶の風味もよしと岩上げあや蘇摩阿童子経に
茶に十徳ありといへり。五徳とかけて茶を烹る人も。まづ茶に十徳ある事ろ
ぞ。茶ハ百薬の長なるかなと貝ざるにいへバ貝ざに痩。客人酒と人作とを
いはしわかるハくらろうるがし。頓遜國に。酒樹あり。その樹の形柘榴に似たるが
その花の汁を採て。甕の中に停れバ数日にして酒となる。味ひ甚美しと
世にいへバ酒も又天工なり。加之天にハ酒星ありて麗き。地にハ酒泉
ありて涌。元正天皇の御宇とよ。美濃國の貧民又は孝なり。その父

酒を好むといへども。絶てさめざる事なし。ある时山に入りて木を伐るに。醴泉ありて流れ出づ。掬て飲ばこれ酒なり。飲びそれを毎日に汲て。家にかへりて父を養ひければ。その事都に聞えしかバ天皇ふかく賞させ給ひて。養老と改元あり。このこと國史に載られたれど。その孝子を世に隠れたり。亦茶ハ酒を醒すといへバ。酒飲ぬ人のくすり。酒後に飲茶ハ腎を傷り。腰脚重墜なるべく膀胱冷痛。痰飲水腫消渇を患ふとあり。これハ藏器の説。本草を見てしるべし。晋にハ七賢八達あり。唐にハ六逸八仙あり。或ハ漢家の七十二人。又金谷の二十四友。劉玄石が一千日。淳于髠が七八斗。王績ハ酒経を著し。劉伯倫ハ酒徳の頌あり。元次山ハ三吾に隠れ。欧陽修ハ一壷を貯ふ。酥酪醍醐ハ酒の長。客人酒中の趣をしらず。茶に酔ものハ醒がたしとぞいふなり。

袖うちはらひ。柱にかかれ目を閉て竟になるびものいはず。爰に忠兵衛ハこの形勢に。胸のうちや安からねど。歎手なくなりてハせんかたなく。國に此國の人気闊達なれども經慮ありて物あらそひをこのみ。然に棄して障子を蹴折り。皿鉢をうち碎き。理非に拘らざるものおほし。されバこそのあたりのどれも気意地をたてて人の諌を容れず。虚空をあつて口とす。須弥をあつて舌とす。薄き唇を弄びて。火をふいひるそのうち。女子と生れてハ養ひがたし。夫危邦にハ入らず。乱邦にハ居らずとかや。知は虚くと長居せんハ無益なり。といひ言して。身ぶるひして走り出。旅宿へも立よらず。港口をさしてゆくほどに。忽途に踏まよひて。名もしらぬ山路にふけ入り。ゆけどもゆけども里へ出ず。ここは甚く遠しく。左を見つつ右を見れバ。あれども人跡絶たる深山なれ

ばかりさへもあらじかし。御室ならねど楓葉も。あつれハ酒の紅葉と怪しく。又走ること十町あまり。但見れバ山の半腹より。生出る松に惹とられしまゝに両足を結び着て。ぶらさがりゐるものあり。近くよりて見れバ。よしなき人なりけり。世に首縊るものハあれど足括るとハ咲も及バず。それ縄断るとみれバさんハなくて斧を三絃として鼻唄をうたふ形容。さながら狂人に異ならねバ。あやしくも天不便におもひて。抱きおろして索を解きて。扶おこして。その故を問ふに。その人甚不興して。われハこの山の麓なる樵夫なり。強飲國に生れながら。家貧しけれバ碎くほどに酒を得飲ず。いとも麁朶を負て里へ出。些の酒にありつくことなれど。山風に吹さまされ可惜酒の忽地に醒んとの遺憾。されバこそかく縛より。倒にさがりて飲たる酒を咽にとめん為なり。とかたる

に。辺ながらきこえども。かく引おろしまゐらせ。さりとてハ情なの。と頻ふかしんに咳バ。夢想兵衛呆れ果て。その危き縄忘りか嗜慾の害之よりや酒を醒さじとて倒にさがれども。脾胃を害ひ。血をのぼさめバいかで醒ざるべき。その山下の索されるれバ又玉の絃も共に絶ん。われハ日本國の旅人に夢想兵衛と呼るものなり。浦島仙人の擁護によりておよそ年色慾の二ヶ國を經歴しちかごろこの強飲國に於びて頻に禁酒をすゝむれども。碎ざれきのかなさハ。ひとりも教に從ふものなし。適に義禄寺の住寺なる老人をそのこそ茶飲を友どちとなしくしに。彼も又口強馬なくて吹入ど。それもながら通行きねバ。筏にのりて海に浮そ。貪婪國へ渡らんとて港口とさして走れども途に迷ひてこの山路に入りぬ。山人ありこれ

見八

を命の親とせり。これが教に従ひて禁酒して天年を保べしと言語を
竭して説諭せば。樵夫哂て冷笑ひ。客人他の危をしれども。自の危
きをしらず。今これ足を樹の梢にかけて。酒を醒さずとするを見て危
しとて諫めしは眼にその禀をみる也。されば人の命は。この禀より
危く。いづれの日何れの時か。絶果んもしりがたし。かくまで危き玉の緒
をとゞめて。世にあるの縁をむすんども。その縁は目に見えねど。しかれども
慾に耽てはづかに世にあるの縁を踰外とせり。和漢今昔あり。しかし
ぞ。此客人が異國に推渡りて。これが長き説人の縫きを責るべし。
強飲國は人気あらく。怒るをもて常とすれば。ややもすれば一拳に打殺
さるゝとも。誰が理非を訟て。おのが為に仇を報ん。亦危からずや。夫
酒に君子の酒あり。小人の酒あり。茶も亦君子の茶あり。小人の茶
あり。酒は天の美禄なり。茶は地の霊木なり。帝王酒をもて天下を
頤養ひ。茶によりて山林の賢者をまねく。鬼神を祀り。福を祈り。老を
扶け。飲びを尽し。百福の會も。酒にあらざれば行れず。これ所謂
君子の酒なり。世界をもて囲居とし。日月をもて天目とし。江海をもて
風爐とし。万民をもて客とし。賑をもてなす。所謂君子の茶也。
應神角鹿に還幸して。大臣酒楽の哥をうたひ。孫仁義内に
園をひらきて。處女茶摘歌を作る。君子は酒をもて胸中の磊
隗を澆ぐ。小人は酒をもて洞房淫楽の媒とす。酒に八行あり。茶に
十徳あり。酒を酌で人を愛するは仁也。盃をあげて客を饗するは信也。
酔て身を忘るゝは勇也。實主相譲るは礼なり。本性を措ざるは智
なり。醒て相勸るは義なり。此八行を缺ときは。その本乱れて。

末なきにまゝらぬ盃あり。狂じてその人の非をしらざれば尻の居らぬ高脚杯あり。酒筵に招れて遅く到るものは信を失ひ。酔て相争ふものは義を失ひ。醒て勧解るものは勇を失ひ。酩酊して相罵るものは仁を失ひ。強て飲せんとするものは礼を失ひ。酒量なくしてこれをしるものは智を失ふ。されば悞を覚り非をしる人は酒にしたしむものはあらず。小人罪なし盃を抱て罪あり。且その咎は酒にあらず。飲ものゝ賢愚にあり。人悞あるものは是を酒に帰す。酒の本に免されものは。飲ざるにまさる福あり。己をしらざるものは段々にすゝむべし。かゝる内物か。醒てたしなめて。その非をしるは酒の徳なり。人その乱酒の醒るまで。日々におのが非をしるべし。過をふせぎざるものはあらじ。酒は固に百薬の長なり。その毒となる所以は火の燎水の溺らざるべし。譬ば一升入の瓢に。二升の酒を盛るものは。溢るゝごとし。人もよく酒量をしらずその量にあまるは五臓に溢れて命を失ふ人あり。酒量をしるものは乱れず。乱れざるを酒聖といふ。延喜十一年六月十五日。亭子院に酒を賜ひ。勅して二十盃を限とし。各に飲しむ。座に八人。参議藤原仲平。兵部大輔源嗣。右近衛少将藤原兼茂。藤原俊蔭。出羽守藤原経邦。兵部少輔良峯遠視。左兵衛佐藤原伊衡。散位平希世なり。その中希世は門外に倒れ。仲平は殿上に小間物店を出し。その余の徒もみな是を忘れて言舌みだりなり。足は地を踏ず。伊衡一人意に乱れず。抽賞として駿馬を賜るよし。長谷雄卿の賜酒記に見えたりげに酒は量なし。乱るに及ばざれと聖人は宣まひぬ。そはつとく侍るに。伊衡は三十盃の酒量をもたせしなるべし。各に二十盃

にして乱れざる其餘の人とハ。十盃或ハ十五盃の酒量をもつて。二十
盃を傾しかバ。酔て泥のごとし。是ハ酒のためにあらざる人の賢愚も亦如
此なり。聖人ハ四海を酒として飲ませども乱れざるゆへに國に
在てハ其國治り。家にあつてハ其家整ふなりし其の徳なくして富貴
にならんことを願ひ其才なくして錬を拒え下歩を恥るものハ。三盃の
酒量をもつて百盃の酒を飲んとするが如し。よしや志を一時に得て。是を
飲尽ことをありとも久しからずして乱れ。其の酔いまだ醒ずして死して笑を
後に遺ことも亦警べし。且酒の利害をいへ。酒ハ富人に害ありて貧者に
利あり。ゆへいかにとなれバ。富人ハ年中樽酒を貯て佳肴をあつめ。酔て房
に入るの楽しみ甚くして淫酒両ながら身を傷りて。短命し。貧者ハ酒を
沽に。或ハ一合或二合。時に従て又飽まで得飲ず。且濁合酒ハ淡しく久しく

人を酔せず。僅に酒気を帯びて。布子一枚の盃をおぼえ。重きをこ
負て遠きに走り。よくその身を運動するゆゑに。酒によつて長寿
なり。志らずや小人ハ使ひがたくして悦し易し。是を使ふに酒價を
もつてせ酒といふもの有りせば。坂ハ眠るとも浮雲助ふ長持を舁く
ものもなからん。さる故に下戸ハ酒の害をしれども酒の利をしらず。上
戸ハ酒の利をしれども。酒の害をしらん。ふく酒を嗜ものハ。其外を
飾らず酔ときハ寡慾にして。思慮をおさへ憂を散ふ。是ゆゑ酒に身を
傷るの毒あれども。おのづから補ふ益あり。又酒を嗜ざるものハ煩悩息え
なく酔ざる故に多慾にして。思慮を去ず憂を解によしなしここにおいて
酒毒の害を脱るといへども。みづから補ふ所なし。然れバ。飲と飲ざるとは。
利害相半ぞ。夫淫酒ハ人の大慾なり。凡夫の禁ぐべきを知りて釈する自

まづその慾を断て。その利害をしらしめたり。西方の聖人ならずハ。争淫せよと飲ませざらしむべき。淫酒ハ国に警むべし。これを責るハ其害の凡夫惛ぞ。釈氏ハ淫酒の二ッを禁じて人情に悖るといへ亦迷へるか。且酒ハ溺るるものハ人その非をしる。茶に溺るるものハ人いまだその非をしらず。茶ハ元来貴人ならふ。貧賤の所行をまなバん為の翫びなれバ閑雅を宗とせし。古器をあつめて金銭を費すハ真の茶にあらず法式に泥る。それ軽俗といへども。真の茶にあらず陸鴻漸ハ當時茶に名高く知れぬ。李季卿が為に恥しめられ毀茶論を著し亦終に茶をいはず。富貴の人ハ却て清貧閑雅の翫びとして。いやめづらしくもあらぬ。貧賤の人ハ貧銭の翫びをなして何のよりどころもあらんかしらず紛々たらバ。しても富貴の翫びを羨み奇品の茶器を求人ともなるものハその害酒

より甚し。朝に起て漱ぎ。晩茶の出花を嗅て口に嗽せ。東窓に入る。旭に向ひて一碗を喫すれバ茶も又酒にまさるをとめり。彼も誹るべからず。是も誉べからず。さるを強飲固ハ茶をしらずして紙めて茶を誹り。客人ハ酒を好まざれど。ひたすらに酒を憎む。好憎あるによつて相争ふものハ公論にあらず。客人酒中の趣をしらざれバ。又その茶に酔へるを暁らずして。人の酒を醒さんとすれど。これも又酔る人なり。まづ茶に酔る人ハ醒して人の酒を醒しまくらし。さりとハ至らぬく。お暇すこしとらんとすれバ。夢兵衛ハ手の舞足の踏ところをしらざりし。慌忙て。樵夫を招よせて。慇懃に腰を引め。それが眼ありながら。豪傑をしらざりし。野夫にも功者ありといふをしらず。忘れたる無礼緩怠恥かしき事なし。いま去ながらも高論によつて無明の酔頓に醒たり。抑この山ハ何と呼ぶ

せらん。先生の宴号もおもしろしこそといへバ。樵夫又かさねて打
点頭。その山ハ酔醒山と唱へて。古今独立の奇峰なり。愚なるもの
酔てその山に登れバ。忽地にまた醒して。その非を暁らせ賢き人醒
てその山に入れバ。酔を催して。その楽しみを助く。しかれバ酔醒の名
あり。客人ここに至て。はじめてその非を暁りたまひしも。ひとへに論の高きによるぞ。
山の麓の高き所なり。ちかきほども鳴呼なすまじ。おのれハ餔糟間八と呼る。凡
酒を嗜むに熱からず冷からず。その間をさす故に間といふ。間ハ則中庸の
義なり。われハ酒を好めども。酔ず醒ず。その間を楽むによりて間をもつて名
とす。又美禄寺の住持にて客人と酒茶を論ずる老人ハ。乙律園蘭
叔といふものなるべし。彼ハ別号を忘憂君といへり。頗才器ある紙めり。
かれ常に飲仲間といへども彼とわれとハ凡庸の才。いまだ物の数ならざれバ。この
国にハ古より。酒聖酒仙多し。客人ハ何用の兵を好まるゝ。却て此方の人に
笑るべし。さしも広りあしと威されて。夢想兵衛ハますます驚き。それがしも
より貪婪国へ推渡りて。亦一修行せばやと思へども。向くべき道をしらず。
進退ここに究りぬと喞バ。間八うち笑ひ。孟子境に入る時ハ。国の大禁
を問といへり。聖人ハ凝滞せず。よく物と推移まり。客人強飲の国に
拒ば。なんぞその糟を餔ひ。その醨を啜らざる。貪婪国ハここにから海
上三千余里なれバ。渡海なりとも容易からず。しかれども彼国の熊鷹
とりくこの山へ飛来て。ある物毎に攫み。おのが古巣へもちゆくとあり。
さるによつて。慾ふかきものを熊鷹といふ。貪婪国ハ貪て。絶ことしらぬ国
なるべし。されバ彼れの熊鷹ハ。梢で放ことをいはひ。その高き木に栖まれ
なバ一歩も労せずして速に彼地へ到らん。といひ命のありはへうけ合

きかどといひも果ぬに。忽地颯と羽おとしさして。天狗か鵰か。おそろしげなる鳥翔きたり。夢想兵衛をとらへて。虚空をさして飛ゆく。

○摠評

世に酒を飲で酔ざるものなし。しかれども。いまだ劉玄石がごときはなし。酔て亦醒ざるものなし。しかれども。いまだ屈原が如きを知らず。むかし劉玄石。中山の酒家に酒を沽しとき。主人千日の酒を与ふ。酔て家に帰りしが死たるが如し。その家には知らで葬る。後に酒家のあるじ。日を揣りて見れば。三年以前に葬るといふ。驚きてその故を告。墓を発き棺を開けば。玄石欠伸して初て醒たり。その棺を開く時。酒気に打れて酔もの。亦百日起ずといへり。捜神記 又楚國の屈原ひとり醒たり。楚の君臣みな酔たり。しかれば屈原を容れず。屈原既に放れて。江潭に遊び。行く沢畔を吟ふて。顔色憔悴。形容枯槁たり。漁父これを見て。説諭せども聴ず。遂に汨羅に投りといふ。漁父辞 又夫中山の美酒。千日玄石を酔して玄石を殺さず。楚國の濁酒。一旦屈原を醒して屈原を殺せり。その衆の一人なり醒んより。衆人の酔ざるにはしかじ。酔ても醒んものは。いよいよ難るべし。酔て川へはまるものあり。醒て淵へ投ものはなし。しかれば屈原が如きは稀なるべし。

夢想兵衛胡蝶物語巻之四　終